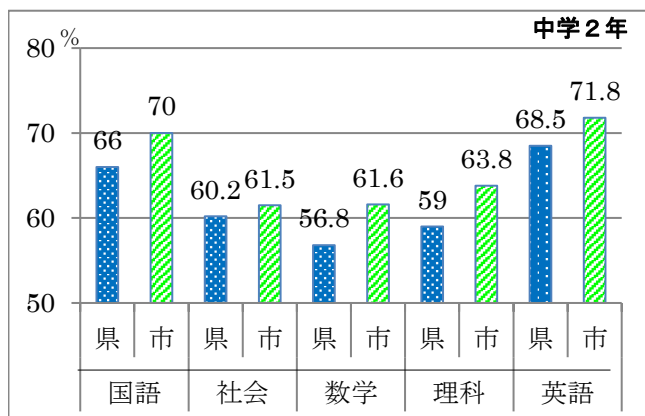


令和2年度千葉市学力状況調査結果概要（中学校版）

1 県と本市の平均得点との比較



【県平均を上回り良好】

中学校2年全教科で平均得点が県平均を1.3点から4.8点上回った。前回（平成30年度）は社会が県平均を0.5点下回っており、他4教科も、1.9点から3.8点上回っている状況であったので、全体的に上昇傾向といえる。

2 各教科の改善策

【国語】 生徒に身に付けさせたい力を明確にした適切な言語活動の設定

- 分かりやすい文章を書くことについて課題が見られるので、書いた文章を読み返す機会を設ける。読み手の立場に立ち、目的や理由、表現の効果等を意識して推敲する学習を充実させる。
- 古文においては、語彙に関心を持たせたり文脈上の意味を考えさせたりする言語活動を設定し、古典に親しむことができる学習活動を工夫する。

【社会】 知識・技能を生かした思考力・判断力・表現力の育成

- 学習課題を、歴史的事象の持つ意味や背景と関連付けて追究・解決できるようにする。
- 地図、統計、写真などの読み取りや主題図の作成などの地理的技能と、諸資料からの過去の事象に関する情報を効果的に調べまとめる技能を高め、地理的・歴史的思考力を高める指導方法を工夫する。

【数学】 主体的に取り組む数学的活動のより一層の充実

- 一次関数の特徴を表、式、グラフと関連付けて表現する数学的活動を重視する。また、具体的な事象の考察において、様々な視点から考えることで、問題に応じて解決方法を判断し、選択できるようにする。
- 数学的な見方や考え方を活用できる課題の設定や発問を工夫する。事象を数や数量、形、大きさ、位置関係に着目して捉えたり、既習の関数と仮定して捉えたり、複雑な情報をデータ化して捉えたりすることで、数学のよさを味わわせる授業づくりをする。

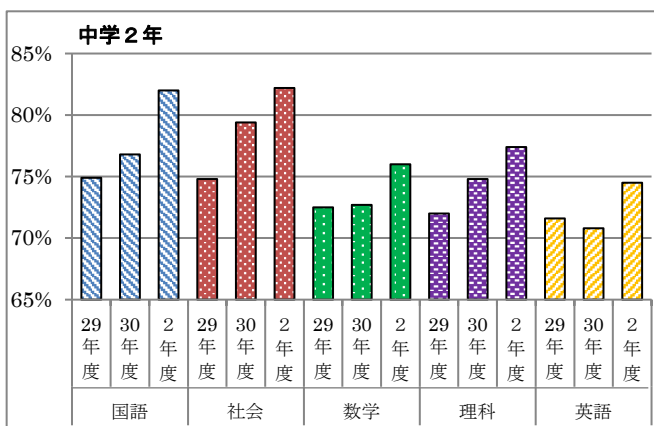
【理科】 目的意識を持った観察・実験、根拠を基にした思考・表現

- 観察・実験では、目的意識を十分に持たせ、根拠のある予想を立てたり、留意点や誤操作等の問題点を挙げたりして、見通しを持って取り組むようにする。
- 結果の分析・解釈・活用では、科学的な根拠に基づいて考察する活動、モデル化して考え、話し合い、表現する活動、既知の知識や考え方を活用する活動を取り入れる。

【英語】 「聞くこと」、「書くこと」の基本を再確認

- 「聞くこと」において視覚教材を活用する等、対話の流れを予測し、目的に応じて必要な情報を聞き取る力を高めるようにする。
- 「書くこと」において綴りの指導をする際、簡単な語句や文を用いて書くことを取り入れたり、数字・曜日・季節・月名等を繰り返し活用する機会を設けたりすることにより、正確に書くことができるようにする。

3 学習に対する意識（学校の勉強がわかる）



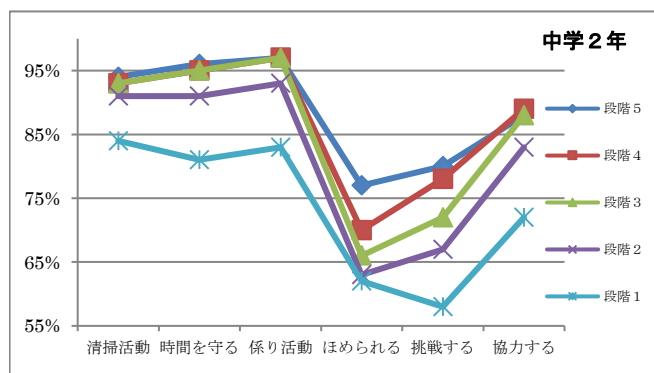
全教科で、「学校の勉強がわかる」という肯定的回答率(※)が75%以上と上昇傾向である

全ての教科において、前回（平成30年度）に比べて向上している。特に、国語は5.2ポイント、数学は3.3ポイント、英語は、3.7ポイント数値が向上している。

※肯定的回答率とは、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」を合わせた回答率

4 学力と学校生活との関連

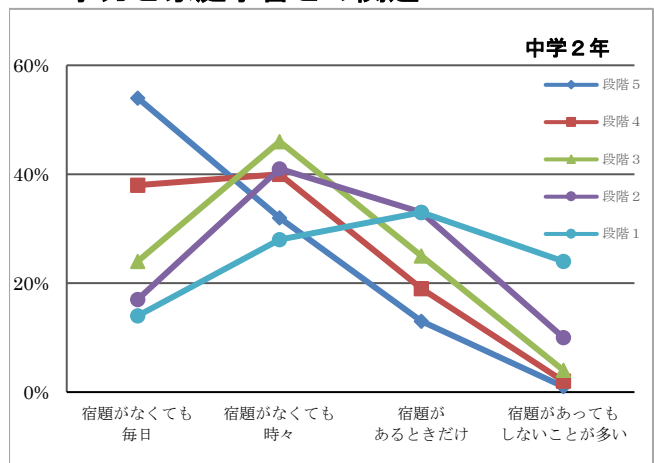
標準偏差により、段階5を成績上位群、段階2～4を成績中位群、段階1を成績下位群としている。



「成績上位群・中位群」と「成績下位群」では、学校生活の態度に大きな差がある

「成績上位群・中位群」と「成績下位群」では、学校生活の態度における肯定的回答率で差が開いており、上位群ほど学校での生活によく取り組んでいると答えている。特に「係り活動」「清掃活動」が高い数値を示している。

5 学力と家庭学習との関連



「成績上位群」は家庭学習によく取り組んでいる

「成績上位群」は宿題がなくても毎日、「成績中位群」は時々家庭学習をしている生徒の割合が大きい。「成績下位群」では、宿題があってもしない生徒の割合が24%と懸念される数値である。また、「スマホの1日の使用時間」（別データ）によると、「成績下位群」は、1日に3時間以上使用しているという生徒が61%と高く、「成績上位群」は20%にとどまっている。